

福岡県の主な農産物の生産状況

令和3年11月15日現在
(専技情報より抜粋)

◇大豆（フユカ）◇

収穫は、6月播種の一部で10月30日から開始されましたが、最盛期は11月13～23日の見込み（平年並み）です。

9月以降の気温が高かったことから、生育後半にカメムシ類の発生が増加し、青立ち株はやや多いです。

8月～9月中旬の多雨・日照不足の影響により莢数が少なく、9月下旬からの少雨により子実の肥大が制限され、裂莢も発生したことから、収量は低い見込みです。

本暗きよの栓は、確実に開けましょう。

青立ち株や大型雑草は、汚粒発生や収穫作業の支障となるため、早めに抜き取りを行いましょう。

最下着莢位置に留意しながら、収穫時に土をかき込まないように刈取り高さを調整して収穫しましょう。

倒伏しているほ場は、リフターキットを装着し、刈取りロス軽減に努めましょう。

◇麦類◇

現在、排水対策として周囲構や弾丸暗きよ等の施工、土づくりとして土壌の酸度矯正等を実施中です。

播種は11月13日頃から始まり、最盛期は11月中旬～11月下旬になる見込みです。

大豆後作における麦類の播種は12月上旬が中心になる見込みです。

排水対策、土づくり、雑草対策を実施してから播種を行いましょう。

また、早めに耕起（荒起し）せず、ほ場の土壌水分や天候を見極めて、適期播種を行いましょう。

二条大麦の早播きは、収量、品質が低下しやすいため実施しないようにしましう。

◇イチゴ◇

出荷は11月1日から開始されました。

定植後の高温の影響で生育は平年並み～やや早く、11月上旬までに半数の産地が出荷開始されました。

11月中旬には全産地の出荷が出揃い、出荷量は11月中旬から増加する見込みです。

出荷開始時の果実は、果形も比較的よいです。

10月中旬までの高温の影響で、2番花房の分化は全体としては平年より5日以上遅く10月22～26日頃とみられますが、ほ場によるバラつきが大きいです。

1～2番果房の間の葉数も昨年より多いですが、2番果房対策で生育抑制が図られていたため、定植後の降雨で草勢が強まった早期作型で6～9枚、乾燥で生育が緩慢となった普通作型で5～7枚程度とみられます。

今後の低温や着果負担で生育を停滞させないように、温度や電照などの管理を徹底し草勢を維持しましょう。

ハウス内の乾燥に注意して、十分なかん水を行いましょう。

ハダニ類、アブラムシ類等の害虫対策を徹底しましょう。

炭疽病などで親株が不足する場合は、健全ほ場の秋ランナーを活用して親株を確保しましょう。

◇キュウリ◇

促成作型は10月上旬から下旬にかけて順次定植されました。

定植以降は好天で推移したため、生育はおおむね順調です。

11月上旬から本格的に出荷開始されました。

促成作型では、べと病やうどんこ病が散見されます。

抑制作型では、アザミウマ類、コナジラミ類の発生がやや多く、一部産地では、黄化えそ病や退緑黄化病が発生しています。

気温の低下に伴い、加温準備を行いましょう。

ハウスの密閉度を高め、併せて被覆の多層化によりハウスの保温性を向上させましょう。

草勢を見ながら摘心、摘葉を行いましょう。

病害虫の防除対策を徹底しましょう。

◇カキ◇

「秋王」の出荷は、10月中旬から開始されました。

現在は出荷後半です。

出荷初期は軟熟果が多発しています。

灰色かび病によるキズ果も多く、秀品率は低いです。

梅雨の日照時間が比較的多かったことから生理落果は前年より少なく、出荷量は前年を上回る見込みです。

「富有」の出荷は、11月上旬から開始されました。

着果量は平年より多いですが、秋季の高温乾燥により果実肥大は鈍化傾向です。ヘタスキやフジコナカイガラムシによる軟熟果が散見されます。

適期収穫に努めるとともに、軟熟果の混入防止のため、選果を徹底しましょう。炭疽病の被害果の除去、園外への持ち出しを徹底しましょう。

◇キウイフルーツ◇

「レインボーレッド」は出荷終了しました。

小玉傾向であるが結実量が多く、集荷量 96t で前年より増加しています。

「甘うい」は、10月22日で集荷終了しました。

10月20日～11月24日で選果予定です。

糖度は前年よりやや高い傾向です。

集荷量は 280 t（前年比 133）です。

「ヘイワード」は、11月上旬から集荷開始されました。

山間部で結実が少ないところもありますが、果実肥大が概ね良好なことから、集荷量は前年をやや上回る見込みです。

一部落葉被害はありますが、糖度も前年より高い傾向です。

適期収穫に努めるとともに、傷果、病虫害被害果の混入防止のため、貯蔵病害対策や家庭選果を徹底しましょう。

果実が濡れると、貯蔵性の低下や腐敗しやすくなるため、雨天日には収穫しないようにしましょう。

収穫果実は、温度が上がらないように日陰に置きましょう。

収穫後の落葉期にかいよう病の対策を徹底しましょう。

◇トルコギキョウ◇

秋出荷作型（10～12月）が出荷中です。

9～10月は日照時間に恵まれ、ブラスチング等の生育障害の発生は少なかったです。

出荷量は、栽培面積の減少に伴い減少しました。

他県、他産地からの出荷も少なく、販売単価は高いです。

11月以降は、最低温度 12℃を確保し、開花を促進させましょう。

斑点病、灰色かび病の対策を徹底しましょう。

◇シクラメン◇

山上げ栽培は 10月下旬から、平地栽培は 11月中旬から出荷開始されました。

ヒートポンプによる夜冷栽培圃場は順調ですが、普通栽培では 9月下旬から 10月の高温により生育はやや停滞し、株のゆるみも見られます。

また炭疽病の発生が多く、出荷量は例年よりも減少する見込みです。
今後、年末の需要期に向けて出荷量は増加するものの品薄による単価高が懸念されます。

急な低温に備え加温準備を行い、出荷直前の蒸し込みは避けましょう。
ホコリダニ、アザミウマ類の加害、灰色かび病の発生に注意し、出荷開始期までに対策を徹底しましょう。

◇豚・鶏◇

10月の豚枝肉価格は、輸入肉の価格上昇や食料品の値上げが相次いだ影響から、比較的低価格な豚肉需要は堅調で平年並みの価格を維持しています。

鶏卵価格は、供給不足の状況から回復傾向にあり、コロナ禍の影響があった前年と比べて122%と高いですが、過去5か年平均比では平年並みです。

寒冷期を迎え、幼畜の寒冷対策を徹底しましょう。

また、鳥インフルエンザや豚熱発生予防のため、農場の衛生管理を徹底しましょう。